文政庚辰
志乃舎

繪本敵討百石話

四

へ13
3306
4

へ13
3306
巻 4

繪本歌討孝女傳卷之四

同 孫

孝女臭を若異ゑ況る事

同 國

清み勢女青靈現乃事

留士民之仇靈魂の図

孝女留士民之仇を見る図

宮城野金堂乃事

大正十年八月廿九日寄贈
本大學出版部

目録

力角宮城殿を説く図

機唱妓と奥してる嚴が許る巻る図

都乃花小図乃機が幸

宮城殿頼ひの図

宮城殿花く機を何ん図

女身を若冥に洗る幸

金山谷又郎産を志めて物語り名れ此二人の妻い楠正儀

長と仕人条り世板本甚内と云る武士のるかりる又甚内君

幸ふ〳〵自石乃紅士志賀甚七と云る者に討る其ハ歌と

討〳〵又乃怨をたうさんと兄弟旧郷を去くたる〳〵一都

乃方へ上る者たるが不恩義に系と姉のおきの仮に妻婦

の図を後び助たる〳〵く甚七を討とぐき物来さうれごと

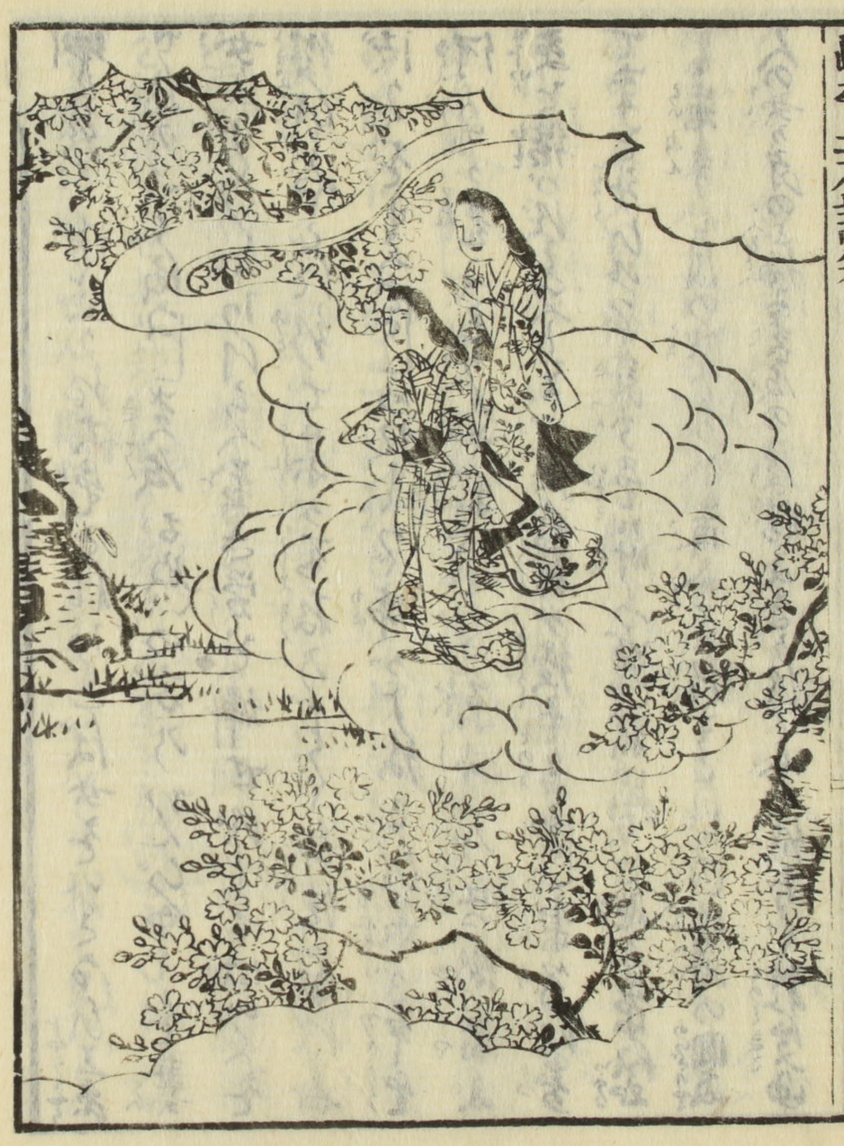
歌志変甚七何図に有り玉不知れ私に成る花街

き図〳〵乃拵客寄り集り諸方乃侠り〳〵何ふい寃恵

養女花街へ
沉む図

乃不たる母人霊ゐて甲斐なき素が下心を恨
時節を人乃御息女お達どの御為とも思ひ給へば
不のされまい花街の中うこ歌乃素なとも出さば忠孝と
も小金き大功此上乃ものぞきやうれい御も心長なく此女を
吉原町へ形しめ給へ体固夫婦ゆ泣むと嫌
給へ心の行へバ別よ一ツ乃願ひあり娘おのふい心勇して乳
母別れ乃ちの男子に賜ふ此度自ら紙を引て歌を切
ん志あり素ふかう妹ゆ乃ふうを求て紙御
を振捨させ既い如れ去て歌乃素を何い男ゆ給ふい
幸ニ云ふ遂させんと願心を男ゆるといえども我も見下乃

御ふ歌だらくふうれた大尽ばば女をいさるひ上素
せ居のつ〻ふ面ゆ」素度おれいの方乃りんびゆうを妻
女よ〻くゆ行ら人並き労と稼せびーて此のぐを
使ひやうに形て某が百ねりどく兵法家にる
だうをもなさしめたまで婦がよ後うび某が幸重
何ふ見ゆ去うんや我いまご素師乃兵つ御者ゆ
変と結ばだこうんど「当士系務が後を名ゆ」渠等に考
て本を外ひひつぐ変多尋い叶ふ度」我国こと巡り素尋
る事年七月の既ちるど」再会ゆ移もこれゆ」皆対の国ゆ
人の妻が身のと偏に変度の愛情ゆまうにく余後方く形変ゆ



富士民之女
霊夢の
図

ろ小姓風なる紙折大に感じ板本甚四辰八我も一面の恋の
あり至娘ときるよる歌討の事ここて女の希ろる縁
乳母の紙流るる谷又郎の牧こ待ふ一こ命に久こ我ろく色
を知せり心を安んじ風くとめどり待ふ色 楓の白石の浪
人志賀基七ところる若い石事恋に縁ありて彼石にけりを
風よばしご彼るや吾やの実実をちらしご何ぞ山ちくこの歌
易出さんと雑きの色し谷又郎と両人の女ろと心安く契ぎ
されとと牧女婦ふすで二人の女い天にもよる心地しく
只行のもお情をたようて女の子の及びる色歌討の事を
を選んもこの兄弟ごるる運ごやとる仮合せて、私言蔓況

俳風ろく云八をよひおきのごの子をお深をるふ云八つりく
又ろく大きにろるしい娘の艶きをや弛とそて狩と得る
方ごしとく子の代い美令八十板と実ろ安ろ謹のる形を
ろく云八い利ろの恋物へおきのとそて変ゆしもるる照若
ご朋風ろ適るる色も紙やとそひ汁らをく洞るごるに又人
送りつ兄弟夫婦のてまごひ再令の時を知ーて云八乃
稀ろいさるられ遍倉にして急き紙人せ別離の衰情進ろ
色を欲ろざーんや

清水観世音霊現乃事

京都坊門通りろ富士氏之仏 よろる英雄あり胸ろ孫呉

う兵法を学び天文を徹し地理を極め廣く天下社稷
の事より山門に入て兵術剣法を学ぶ者大泉小次郎の諸流
より倭民歩卒五百余人を名海内に表し仰ぎ
まひとと云者ありし民之丞あり曉乃義と云ふ
陣中の撫の花爲うらうらとある表風の微しく
を踏歩をめぐりしてゐるうち居りしの書羽乃勝のかうみ
拙る撫乃本二本ありけり本にも花乃咲てしんみ
瀧のけ〳〵きとえんと燈し三上りてうるうるうれ枯葉
紙の若葉はすい出蒼と出〳〵忽ちうるいしき花咲紛とうるふ
嬉〳〵と笑人びとうるみうるいのちまうる春りうん容うるい

きひ女二人撫乃中に花さうる民之丞問ふ今まで実よかい
そぶふ乙女乃忽然と撫乃中に立居るいつの方ふ来うるやう
まつよる狼狽れを驚〳〵拾うる本にも花咲実のる新世界の
所撫言よいそう洗ふ乃のいべき紙〳〵兄弟の女御乃の力を
備弟〳〵也花さく去る立坂や関乃赤を張ぐうるうるぐ
来ぬるも大悪のうぐうる言うるうそと涙ぐ実由ふ
ぞこい行る乃みさく戦力をたのくいやとと云る彼女若んと
乃力撫接るく耳を陣〳〵ぬき張るて。義は笑うう民之丞考
実乃乃ひひ義乃始終をうう民恵ど見ふ野孫義乃
業ひ森よちて乃義乃云乃心地ぞちるふいよ〳〵不思議の

富士武之丞
清水寺之清水
巻女を
見る図

ゆるしたまひ翌朝松田孫右衛門清兩人を右奥に清水寺
の傍で佛殿の敷きまり坂をかりに勝乃かりと歩行る
ゑ御十月中旬小春乃晴のどけくて花こそなれ春乃さま
よ美方うるゆゑ思ひ深乃花に春の内よ見たいと本のさまと心をこめて見るなどに坂の
下より年の比まだ十二三歳方る女童引連しに十七八余りの
浪人と覚しき男親世者小清づるして春爾乃物語りして
来るあり武文の貝紙しらくと居る内よ娘春の内よ見て一人
よ旅も似うう余りの不思議さ河をうけそんるる女童よ
物やさん若も来園出せの娘まて兄弟二人是もこのゆりく

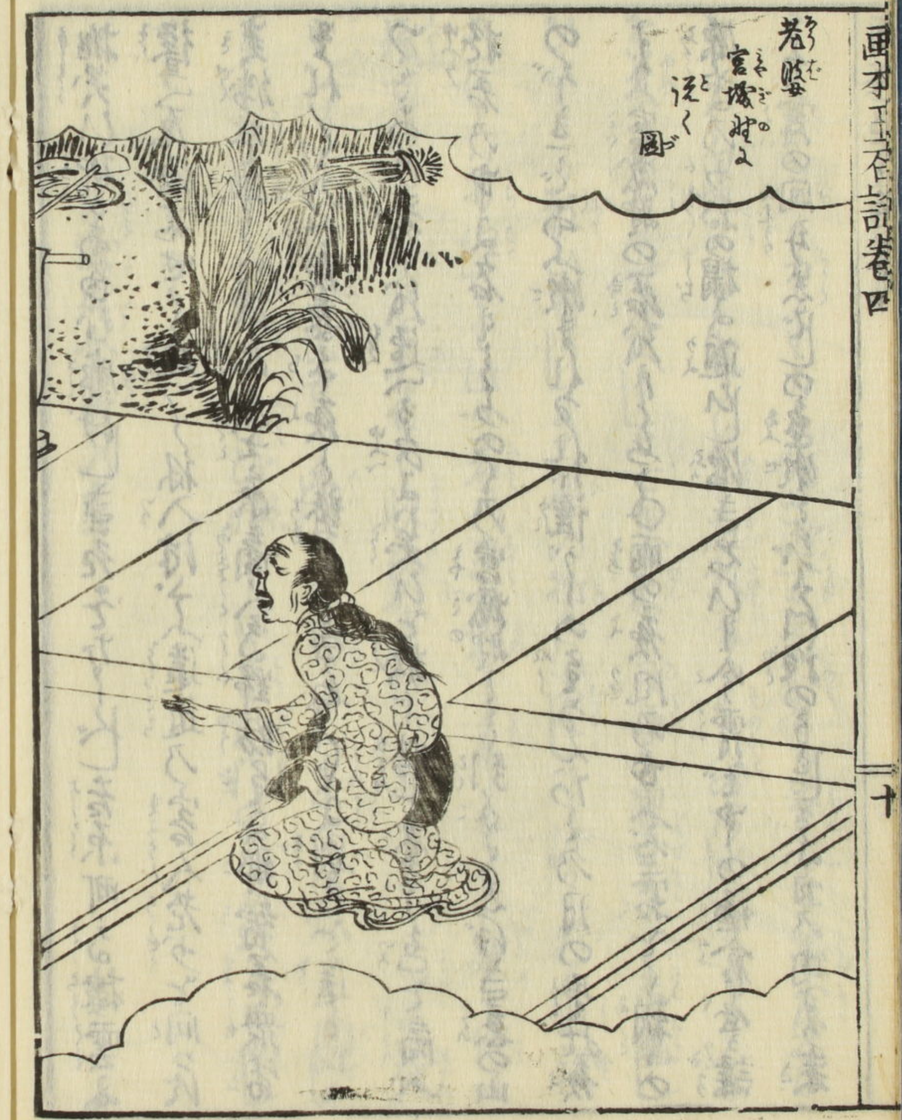
登りうる人すていうんよきやと問ふる二人乃旅人大きに驚き
臣ゑ乃に礼をなし仕りのごとく我こいをく来乃國の者よ
て此女ご婦と二人ゞ已親のうゆしてうるくく登りいたや若も
何人いるゆるゆにく此娘ご身の上とたづね奉りやと問ふる我
ら出地よ住居せる富士民之ゑ者方り眺験親世者乃
霊ゑ貴を祭りとくまり年りて海道をお結ふり彼浪人再び
驚き地よひとしてやうるい系い常陸國相馬郡よ住居仕
る伊義健門と中浪人すて此若乃英名陳の来ふるくる
いまゞ謂見せうるゆを眼るのくうるゆくゝ出奇親世者
の霊況著明きゆゑ雑くも恐れる女大屋のひて此

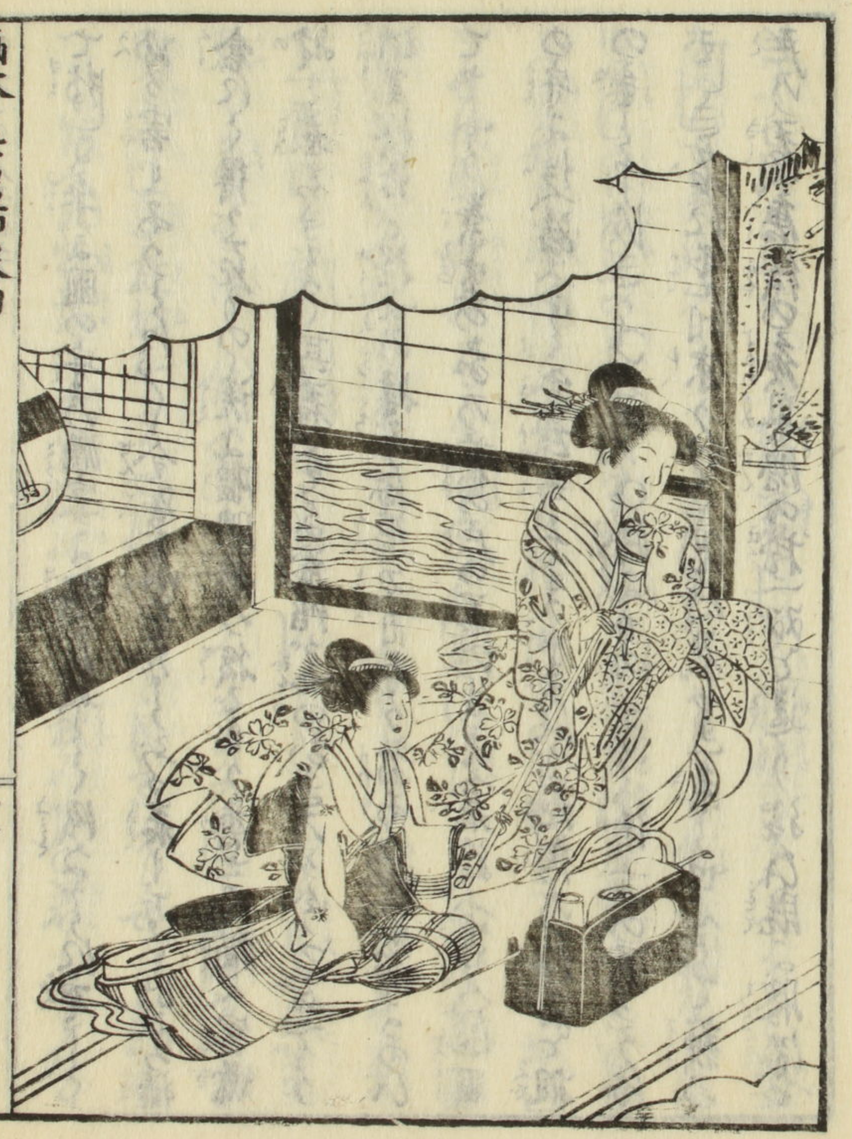
実城殿の
金盛の図

より家に立つり力ともなるべき御方と頼まり奉るを逆賊といひ
以てども白地にいや出づる程あれませる其人のかたじし心なりん方
を夜にも告させ給へかしと七日七夜か日毎に観世音に参籠し
ひたすら祈ひまゐらしに大悲の誓ひ虚しからざれば不思議
の御告げい打任せて此女君の力を頼みまゐらする娘を従に
巡せられ人に手を合せて悦びぬるが然る故中毎に女子の祈
もなり給じめ推察せり委しき密なるは我家が屋敷にて聞じ
よく御運を観音を再び拝し一条坊門の屋敷へぞ帰じ
てこそ帰りなり

宮城姫全盛の事

桃笑ひ柳があやむ廓げしき花をなし〆し吉原町なる楼雲に
登へ尾屋となせく建つ〆掾入津にふ遠近の客人花かと問りに
貴賤をえらび東武士京商人なる野坊主に那智若衆諸
まれく乃一夜妻を夜と契ると〆ぬぐに別れを送るいのか
つきあり来る行逢へるタに笑ひと歓び情を楽しる色を商ふ
揚君の中に名もさちの〆乃宮城姫としく引手もあげき恋の山
のかりもどあふ流まれるれい誰が〆のまるんいかと乃月の屋地夜
より宮城姫の若松りしあうる雨の夜風乃由なる雲君とく朝かの
添寝の乃ふおの楊に通ひし添きそひも今宵ぞ中の通倉に登る謙
まて雪月の間斗去だしの逢瀬ときつき後のかたもさふ日乃内より来


老婆
宮城野の
と泣く図



て酒宴を拓うしぬるに成るぐらに成るく
ゆる客もあるうちに食堂をなるぶる若もなくけるる猫
食にく得ぐ乞りの流を腦脳脉の後ごりの唐土の猫を宮城
殿と表ちまるく甚若こそを義姫ぶ女のおきろぶ今の名ゝ
計星に客と経女乃婦もを侍婆力自ちる者あり宮城殿をあひ
てやゆう家室の家乃萩の戸の若乃まを人居給ふ宮人小姫
の守を使給ふ殿ぐ義武をそまるまるぶ光街乃雅名と相
のをとやひきぐをもろう澤よりの一給ふ御方の若ぐうを
はしき名に見付来うけく力乃見を一条うせんとて萩乃
戸乃若へ唐後の夜具源の松一双と送り給ひ脇へ勝源を

きこせ給ひぬ見まう後ひ若としく時姫をるるをよとて婆
をや」て表給ふまるいくをといるをく余乃若なるが
心易」宮城殿の若をけ星に殿ぐ一度時分蒙んとて頁夜
もを夜も通ひはるく給ふ御方のを数ぐりなく想を
ませば婆が婦姫をるを調ふぐを若に給るぐ余乃ろをき
若小物ぐ」を給へやとやせども叶ふぐるぐ殿のをうて表
て一霄月ぐ席を宴せばる臣るぐとるを宮を捨殿
羅く条りて語り給ふ先ふるるのいらぐ時間をるを
のめとは」き放材をるるせ給ふんと目をひるせく息も
つぎ給へぐ物語り奴宮城殿若へる萩乃戸の若とるるいと

きまりたるもんまじく物しるべきそれ乃知情浮世の神方と
宮城野が睦びすり代りしに実くるまる萩の戸の若ざかりの方もう
しろめたいふ伝いも陸ひゃ世ごとくるの調乃恋にうう
てう乃相方なる客狂をとろ人張を髪じさまぐるとろ梅ぬ
恵と今望方なる宮城野をてあれが相が心よ恋乃ろるのこう国よ
見るこのさへ客易うしに今ゆゆくつまぬ先こそまうつめ
と若乃情婦萩乃戸よ再び繋りうんとうども蔦情乃人を
恋よ情浮伝ぐうしにとて元も伝へどうべ余の拵若よ変て
宮城野萩の戸なとう用さもるだうう金浪と投うんにしと
分とと忘恵其の若色の若色若れ先皆相が多情なると悪

て若変とうよ拵若もるく中流又揖を変ひ心地うて相恵
恋ひく拵うう名宮よ都ようるぐくと宮城野と見ん名
分よりうう客人あり先いまぐ宮城野が萩ひをも見ん名
こ若に元八乃をふとせよお洗ゝ分うけて弟へ裏せんこを
なうふ元八の恵ゆいようこびまいうもひけ宮城野が生得別
繋ひしてこが心よ深ざる方へいつふゆせど分を任せくまう
恋ひいさんがいまぐ相談なる返御方の分変ひあるひ出のへ人
とこの果ゝて叶妓淫ひゃほゝ今霄ハ上総の宇乃若遣
異せうこ兎が若乃級へ糸うぬる日極るさうゝへくも皆乃
円い若しうほゝ奥乃亨うて宮城野と名恵真ある宴と

枕唱妓を
引ぎし
女魔ぶ方へ
春岳画

設け給ひ都人乃通情てふ詞をもて主が心を和し給へた
其後よ永清乃ぶ給よ乃びやしろんくとゝよ彼客人こゝく
海が升ひよ伊れ臣しくゝ儀よ大宴を設け雪沢唱妓集り
来りて燭乃光りい白日乃ごらくゝ山海の美味席よ満脆よ
酒宴を傳ゝ多き者乃みゝるふや楓なる毋のくゝ
を受のゝ本ゝ去なきゆよえひけ紅に来り都乃客人ゝ
てや者る僕いたる小園の鄙人ゝてひが色ける花街の名
よ乃ごさし現るたさまの孤しくひんゝ宮撥妓にるんるし
ひよ乃海れ志をゆ受へくいふゞし忍なるものいて今い蛾
必しゝくゝ多ゝ具せゝ都よ彩と称りて今天名妓

の懸くれいのいれ今霄の酒宴僕よ月席をあるし給ひ唱妓
を右つ主ゞ乃奥を添なるゞといふせゝるふ彼鄙乃客人
まいゝくいる張白よゝをへざゝ乃せ給人ゆ心よけなるふ楓妓び
妻ゝるゞ主き唱婦数多引ゞしゆゝせが元人来れいこいる
主しき御光来花とゝちれ二客の色をあゝちふ大童風う
吾や瓶ゝくぞめくゝ毋ゝく含三人乃客花街で汎来へ
不俸ゝくゝさ乃ゝさ主乃折解く孔酒よゝこいありにゝう

都乃花小園の楓乃幸

蓼　丁ゝ乃を義なりう義よあゝ比伊蒿なり衰ゝ者う
文母戒を生ゝ勿労れを毛詩の雅今乃よゝろれ宮撥妓

画本玉石記巻四
十五

そき
黒塚
猩しの
園

有る歎の聲を聞に父の膓をたちける人にあるまじきなりき
思ひ夫と婦の悦びそバ李武謁の上揺や誰がいふせし類ひそ
と向に鏡ハ人より猶ど間ふくうき髪筋乃乱まても物をいふ事
なく紅粉も物うくてかりみだされ素顔さへ尚艶よいのて打るぞ也
が心に悟しける美人乃新粧人まして鏡をまえ外に施しむ宮
城野爽に粧ひ屏風の陰よりをどらしこれが酒宴の媒はしして一座郎
て是岐婦女護の嶋ふ其なしといへども京の客人あれける者ハ身乃
長六尺に余り色白く眼星乃ごとく照り口大にして威風勇壮
けうりを排ひ為者乃人にあらじといへる中國の楓よへるハ凡かへ今
そ此じめるれど色黒く眼尾あがり鼻ひしげく麗粧再あり此よ

ふところにしてよくしりたれば誰が知らん年月影うつる父の歎き悲嘆
七尺ありこれ宮用ゆやと時を定めてこれとしもまがふべくもあらね
まくれば宮城野胸ふさがり憂きまでと思ひきや身もふるひ息
あへぐを押しこらへて座敷へハ出しもせしが己が園にぞありき
のりねうごかすものみぞそとハいひて知らん両人乃客人数盃乃
妓婦等衰へてに宮城野の君のつらふかやなんとも絡ハざるぞと罵
に楓なりける禅の亭主をよびて甚怒り宮城野ハ何故にかく
ざるぞ我々両人をばけ来たるに遠し亀が谷の鏝へ参らせよかし
なくれまし右遅参りし色衰て置不入か盤一人きり来て花
と楓乃両人に向ひ宮城野の身の上今宵参り酒宴にも出いはざる

宮城野
薄衣の
勅旅を
うぐひす
園

たゝふ小幸に絢爛く月は勝くゆしまし今宵のたゝみ宴よの淺さ中
うゝぞ幸さかく作人まてこそ市久ゝ入来くゝ久ゝ見とゝ〳〵ゝ
紙ゆくくこゝゝゝゝげゆる愛女ゝゝの都乃希人も来りまゝ久ゝ此ゝ痛
と構へて来くゝゝゝこゝ寄怪ゝゝれよゝ〳〵来ゝ沈ゝ来ゝゝ紙ゝて遥へ
来くゝと刀抱げ立ゝとゝると都の喜波とゝゝく抽ゝゝ乾物の習
ひ抱女の立乳地ゝゝ乾さまこそ面白けゝ今宵労ゝゝゝゝゝ明日見
んお立さゝゝゝゝ成明後日遊べゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ打捨一面春明ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ幸ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

繪本歌詩巻之四終